

学会賞をいただき、大いに喜んでます。統計関連の研究や教育を30年やってきた時期での受賞で、研究に関する評価だけでなく、いままでの教育も評価を受けている、と一人で納得しております。京大経済の統計といえば蜷川、と直線的に結びつくのが昔からの流れでしょうが、そろそろ違う流れにも気づいて貰えるのではないのでしょうか。賞の推薦者に、研究室の関係者が含まれていることが自慢です。

自分の研究を振り返ると、同時方程式の理論的な研究をしていた頃は、無我夢中でした。あの頃では理論屋の中でも大いに関心を持たれていた問題であったわけです。しかし、我々が同時方程式の研究をしていた時期でも、離散選択は既に脚光を浴びていました。そして、80年代の半ばからは非定常時系列、90年頃からノンパラ、それに大量データに支えられた金融計量など、世界の関心は移っていきます。

一つのトピックがほぼ完了した印がノーベル賞で、同時方程式はホーベルモ(1989)、離散選択ではマックファデンとヘックマン(2000)、非定常時系列はグレンジャー(2003)、金融計量はエンゲル(2003)となっています。理論屋にとっては、誰かがノーベル賞を貰った後でそのトピックを研究するのは、しけもく拾いか、セレンディピティでしょう(「しけもく」は、湿気た吸い殻のこと。アメリカで進んでいく経済理論の論文を読んで「重箱の隅を楊枝でほじくる」ように、論文種を探すことを皮肉って、経済学でよく言われた表現。括弧内も同じ。セレンディピティは、映画とは違い、日常的なものの再検討から、大きな成果が生まれることがある、といった意味を持つ。)

昔のトピックを追い続けることにも意味があるのは、言うまでもありませんが、計量経済では経済分析ありきで、実証分析に使われないmethodは消去されます(同時方程式にもそういう面がありましたが、なぜか公務員試験に問題が出題される。)計量理論の現状も、数学的に困難な理論は、将来どうなるのかと憂慮します。役に立てばよいのですが、経済分析ありき、という立場からは、理論だけの発展は意味が少なく、また、経済屋さんから嫌われる原因になっています。

これからは、やはり経済分析にとって何らかの有効な方法を一層めざすことが重要でしょう。そのためには、今までのようにデータが降ってくるのを待つのではなく、自らデータを求める態度が不可欠なようです。この方向性がないと、計量経済学はひどく寂れていく事でしょう。